SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

対話(ダイアローグ)の限界と可能性：プラトンの描くソクラテスの対話から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡哲学会 公開日: 2023-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 伸司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029847

静岡哲学会編『文化と哲学』第 39 号（2023 年）、35～46 頁

対話（ダイアローグ）の限界と可能性―プラトンの描くソクラテスの対話から―

田中　伸司

１．問題設定

対話という言葉は、哲学はもとより政治・医療・ビジネスなど、さまざまな場面で使われている。哲学においても、本稿がとりあげるソクラテスの対話の他にも、子どもたちのための哲学対話や臨床哲学対話、哲学カフェあるいは弁証法やテクスト読解など、多様な活動が対話と位置づけられており、「対話」という語はほぼあらゆる型式のコミュニケーションを指すことができるように見える。極端な例かもしれないが、言語を介在させずにただ傍に佇むこともまた、そこに何か通い合うものがあれば、対話と呼ぶことが許されるように見える。見方を変えるなら、「対話」という語は曖昧にあるいは変幻自在に、もしかすると同音異義的にすら、使用されているのかもしれない。

本稿では、プラトンの描くソクラテスの対話を四つの特徴にそくして分析し、その対話としての限界の確認をつうじて、対話という概念の可能性について考察したいと考えている。もしこの考察においてソクラテスの対話を一つの範型として扱うことに一定の意味が見出せるならば、対話という概念を浮遊させないためのいわば係留地を、プラトンの描くソクラテスの対話に見出したことになるだろう。

２．プラトンの描くソクラテスの対話

ダイアローグ、ギリシャ語ではディアロゴスであるが、この語について語源的に分析すると、よく指摘されることではあるが、「ディア」と「ロゴス」から構成されていることが分かる。「ディア」はこの場合「～の間で」という意味であり、そこから「互いに」や「向き合うこと」あるいは「対峙すること」という含意が生じる。他方、「ロゴス」は「言葉」「言論」と訳されることも多いが、ratio というラテン語訳にも表れているように、辞書的には「計算」が第一の意味であり[1]、さらには「説明」、「理（ことわり）」、「原則」、「比」などの意味がある。このように「ロゴス」については意味の広がりが大きく、結局はソクラテスの対話（ディアロゴス）の「ロゴス」はプラトンが描いた対話の中身にそくして意味を確定することになる。それでは、プラトンの描くソクラテスの対話とはどのようなものであるのか、見ていくことにしよう。

プラトンの描くソクラテスの対話について、本稿ではその特徴を次の四点にまとめてみたい。一点目は正解が用意されていないことであり、二点目は具体的な人物によって担われていることであり、三点目は真理に向けての探求であることであり、四点目は一問一答とい

[1] Liddell & Scott, *A Greek-English Lexicon*, 9th ed., revised by H. S. Jones with R. McKenzie, Oxford, 1996, s.v. λόγος.

う形式によって遂行されることである。初めの二つは対話の外部から見た特徴であり、後の二つは対話のなかでソクラテスが口にする特徴である。それぞれ確認しよう。

第一の特徴について。プラトンの対話篇とりわけ初期対話篇においては顕著であるが、対話による探求はしばしばアポリアー（行き詰まり）に陥り、ときには暫定的な結論が提示されるとしても、対話者たちが最終的な回答を手にすることはない。つまり、正解や結論はあらかじめ用意されてはいない。説得や演説には開始する前に既に結論があり、それを目指して行われるのとは対照的である。対話には問いはあっても、対話の結論がどうなるのか、対話者自身にも分からない。対話はそもそも完結することを約束されてはいない。じっさい、対話篇の終わりは対話の完結ではない。『リュシス』では外的な介入により対話は強制的に終了され、『饗宴』ではソクラテス以外の対話者たちが寝落ちするなどして対話の報告も途切れ、朝を迎えて散会した様子が描かれている。しかも、ソクラテスの対話相手たちは説得されるどころか、自分が論駁されてもいっこうに納得しないこともある。例えば、アテナイの将軍ラケスは勇気についての対話を終えて、「もどかしさ」（cf.『ラケス』194a8-b1）を次のように訴えている。

> 〔ラケス〕「勇気について、それが何であるかを理解していると思っているが、どのようにしてかは知らないが、たったいま私から逃げだしてしまい、勇気を言論（ロゴス）によって捉えてそれが何であるかを言うことができないでいる。」(『ラケス』194b1-4[2])

このような不満を表明してはいるが、ラケスの主張する「勇気」に対する論駁はラケス自身の同意をもとに進んでいる。つまり、ラケスは対話相手として対話の進行一つ一つにコミットはしているのだが、その結論には納得はしていないのである。

ところで、ここで注目しておきたいのは、対話によって互いの思いの違いが霧散するわけではない点である。説得や演説が目指すこととは大きな開きがあると言える。対話とは「互いに」「向き合って」あるいは「対峙する」ことで動き出すのであり、自他の異なりを見失

[2] プラトンからの引用については、『ラケス』と『メノン』に関しては J. Burnet 校訂の *Platonis Opera* III, Oxford Classical Texts, Oxford 1903［使用した版は 1985］）を用い、それぞれ三嶋輝夫訳（講談社学術文庫 1997）と藤沢令夫訳（岩波文庫 1994［1998］）を参考にさせていただいた。『ゴルギアス』に関しては E. R. Dodds, *Plato: Gorgias*, Oxford 1959[1979] を用い、加来俊彰訳（岩波文庫 1967［2007］）及び三嶋輝夫訳（講談社学術文庫 2023）を参考にさせていただいた。『クリトン』『ソクラテスの弁明』『パイドン』に関しては新版 *Platonis Opera* I, Oxford Classical Texts, Oxford 1995（前 2 作は W. S. M. Nicoll の校訂、『パイドン』は J. C. G. Strachan の校訂）を用い、『クリトン』は田中享英訳（講談社学術文庫 1998）を、『ソクラテスの弁明』は三嶋輝夫訳（講談社学術文庫 1998）及び納富信留訳（光文社古典新訳文庫 2012）を、『パイドン』は岩田靖夫訳（岩波文庫 1998）及び納富信留訳（光文社古典新訳文庫 2019）を参考にさせていただいた。『国家』に関しては S. R. Slings 校訂の *Platonis Respvblica*, Oxford Classical Texts, Oxford 2003 を用い、藤沢令夫訳（岩波文庫 1979［2019］）を参考にさせていただいた。

うとき、そこに対話を発動させる力はもはや失われているのである。

第二の特徴について。プラトンの描くソクラテスの対話では、対話者たちの発言は、それぞれの思わくや生き方を基盤としている。とりわけ初期対話篇の対話者たちは、初めは意気揚々と、もしかすると気軽にソクラテスとの対話に加わり、気づいたときには自分の歩んだ人生を賭けた対話へとはまり込んでいる。『ゴルギアス』では次のように語られている。

〔ソクラテス〕「そして友愛の神にかけて、カリクレスよ、君は私に対して戯れることができると思ってはいけないし、たまたま思いついたことを自分の思うところに反して答えてもいけないし、また私から語られたことを私が戯れているのだと受け取ってもいけない。なぜなら、君は分かっているからだ、私たちの言論が係わっているのは、誰であれわずかでも分別のある人間なら、それ以上に真剣になることがないこと、すなわちいかに生きるべきかということだからだ。」（『ゴルギアス』500b5-c4）

このソクラテスの対話を命題のようなかたちに落とし込んで分析するとき、対話者たちの発言は文脈を失うことになる。命題は無時間的であるのに対して、対話者たちの発する問いは問うべき時と場において問われており、また問いへの答えもその時と場によって縁どられて発せられているからである。問答における時と場が決定的であるのは、それらが対話者たちの生き方と彼らが生きている世界に結びついているからである。それゆえ、対話者たちの問いと答えが命題のかたちで分析されるとき、彼らの生き方や彼らの生きた時代を地とした問答はいわば脱色されてしまう。そして跡には、教説化したソクラテス像が現れるということになりかねない。命題化された問答は、たとえ探求として扱われるとしても、論理のうちに閉じており、ソクラテスの発言が真なる判断として取り出されるのは容易なことだからである。とはいえ、例えば無知の自覚をソクラテスの教説であると受け取るならば、それはまさに皮肉な事態である。

第三の特徴について。プラトンの描くソクラテスの対話は真理へと向かう探求である。友人のクリトンに向けてソクラテスは、真理について考慮すべきであると警告する。このソクラテスの発言の舞台はソクラテスが死刑判決を受けて収監された獄中であり、そこへ脱獄を勧めようとクリトンが説得にやってきたという場面である。

〔ソクラテス〕「すると、君、大衆が私たちのことをどう言うかを、私たちはまったくそのように考慮すべきではないのであって、正しいことと不正なことについて心得のある者が、そのただ一人が、すなわち真理（アレーテイアー）そのものが何と言うかを考慮すべきなのだ。だからまずこの点で君は間違った提案をしているのだ、正しいことや美しいことや善いことについて、またそれらの反対のことについて、私たちが大衆の思いなしを考慮すべきだと提案しているのならね。」（『クリトン』48a5-10）

プラトンの描くソクラテスの対話は「真理そのもの」に向けられている。対話が、第一の特徴で見たように、たとえアポリアーに終わるとしても、それは真理を求める探求として意味があると主張される。『メノン』におけるメノンの召使を相手とした想起の実験は、この証明として受け取ることもできるだろう。想起の実験において、メノンの召使はソクラテスに二倍の面積を有する正方形について問われ、自信満々に一辺の長さを二倍にすればよいと答える。しかし、ソクラテスに問われていくなかで、その自分の答えが誤りであると分かり、次には例えば一辺が二プースの長さの正方形を二倍にするためには一辺を三プースにすればよいと答える。そして、ソクラテスとの問答をつうじてその答えも誤りであると自分自身で分かってしまい、アポリアーに陥る。探求はアポリアーに陥るが、それはその召使にとって良いことであると、ソクラテスは指摘する。

> 〔ソクラテス〕「それでは、私たちはこの者〔メノンの召使〕をアポリアーに追い込んで、シビレエイのように痺れさせたが、まさか何か危害を加えたことにはならないだろうね。」〔メノン〕「私としてはそうとは思えません。」〔ソクラテス〕「じっさい、私たちは、問題となっていることがどのようにあるかを発見するために、何か役立つことをしたように見える。なぜなら、いまならこの者は〔自分がその問題となっていることについて〕知らない者として喜んで探求することだろうが、前にはしかし二倍の面積の正方形について二倍の長さの線をもたなければならないと、気楽に多くの人に何度も〔語り〕、うまく語ったと思っていただろうからね。」（『メノン』84b6-c2）

この真理へと向かう探求であることの強調は、アポリアーに直面し懐疑主義へと落ち込んで探求の意味を見失うことのないようにとの配慮とも言える。想起の実験を終えた後のソクラテスの言葉は、このことを端的に示している。

> 〔ソクラテス〕「じっさい、私もまた自分でそのように思うのだよ、メノン。他のことどもについては、この説〔想起説〕のためにそれほど断言するものではない。他方で、人が知らないことについては探求しなければならないと思うほうが、知らないものを発見することもできなければ探求すべきでもないと思うよりも、私たちはより優れた者であるだろうし、より勇気づけられて無為ではなくなるということ、この点については、もし私にできるなら、言葉のうえでも行いのうえでも、まったく強く主張したいのだ。」（『メノン』86b6-c2）

対話が真理へと向かう探求であるという特徴はまた、現実の権力関係に発言がゆがまないための支えとしても機能していたように思われる。例えば、『ソクラテスの弁明』においてソクラテスは刑罰などにはひるまず、「知を愛し求めて私自身と他の者たちとを吟味すること」つまり対話することをやめないと宣言している。

〔ソクラテス〕「だとすれば、アテナイ人諸君、私は恐ろしいことをしたことになるでしょう、もし指揮官たちが――諸君が私を指揮するために選んだ者たちですが――私を配置したときには、ポテイダイアにおいてもアンピポリスにおいてもデーリオンにおいても〔これらはソクラテスが出征した戦場〕、私は指揮官たちが配置した場所に他の者と同様に留まり死の危険を冒したのに、他方、かの神が――そう私は考え、受け取っているのですが――知を愛し求めて私自身と他の者たちとを私は吟味して生きねばならないと命じられているのに、ここで死や他の問題を恐れて戦列を離れるとしたらです。それは恐ろしいことでしょう、そのときにこそ私を真に正当に法廷に引き出すことになるのです、死を恐れることで、神託に従わず、じっさいには知者でもないのに知者だと思い、神々を認めないという理由で。」（『ソクラテスの弁明』28e1-29a5）

先の『クリトン』からの引用にも示されているように、ソクラテスは真理や神という目には見えない権威を認めることで、アテナイという現実の国家や大衆への「アブ」（『ソクラテスの弁明』30e5）であり得たと言えるだろう。

ところで、既に特徴二の引用にも表れているが、この真理へ向かうという第三の特徴に関連して、よく知られているソクラテスの要求が出てくる。すなわち、ソクラテスは対話相手に自分の思ったことを率直に言うことを求めるのである。

〔ソクラテス〕「すると、いかなる人に対しても、彼らからどのような仕打ちを被ったとしても、不正を仕返してはいけないし、害悪を及ぼしてもいけないことになるのだ。そして、クリトン、ここでよく注意してもらいたい。これらのことに同意するとき、君が思いなしていることに反して同意することがないように、と。なぜなら、これらのことは、ごく少数の人がそう思っているし、そう思うだろうということを、私はよく知っているからだ。」（『クリトン』49c10-d2）

なぜ思うところを率直に語る必要があるのか。『ゴルギアス』では、法廷弁論のように議論を組み立てようとするポロスに対して、次のように指摘している。

〔ソクラテス〕「他方、この論駁は真理に対しては何の価値もない。〔略〕しかし、この私は、たとえ一人だとしても、君に同意しないつもりだ。というのは、君は私に同意せざるを得ないようにしているのではなく、私に向かって偽りの証言をする者たちを持ち出して、ほんとうのところ（ウーシアー）すなわち真実[3]から、私を追い出そうと企

[3] 女性名詞アレーテイアーではなく、「真の」「じっさいの」を意味する形容詞の中性単数形ト・アレーテスの属格形が用いられている。Dodds 1959[1979]によれば、直前のウーシアーの隠喩的な使用を説明するための、すなわち‘“substance” or reality’といった哲学的な意味で

てているからなのだ。」（『ゴルギアス』471e7-472b6）

ここで注意したいのは、真理が対話者の同意と結びついている点である。第一の特徴で触れたように、対話相手の同意をもとに対話は進行する。対話は演説や情報発信のように一方向的なものではなく、複数の声によって織りなされているからである。そして真理へ向けての探求であるがゆえに、対話者はおのれの思うことを率直に語ることを求められ、また対話者たちは自分が真実であると思うことを率直に話すことで真理へと向かうと考えられている。たとえ真理へと向かっているという保証はないとしても、である。

第四の特徴について。プラトンの描くソクラテスの対話が一問一答であることについてはしばしば指摘される。じっさい、そのように求めているテクストもあり、「対話する dialegesthai」という語に「一問一答で」という文言を補って訳出されることもある[4]。例えば、『ゴルギアス』では対話に先立って、ソクラテスは対話相手のゴルギアスに次のように求めている。

〔ソクラテス〕「それでは、ゴルギアス、はたしていま私たちが対話しているように続けてくれますか、つまり一方は質問し他方は答えて、そしてポロスも始めていたような、あの長い言論については次まで取って置いてくれますか。いや、それはあなたが約束してくれていることであり、違えることなく、問われたことに短く答えてください。」〔ゴルギアス〕「だが、ソクラテス、答えのうちのあるものは、言論を長く用いなければならないのだ。しかし、できるだけ短く試みることにしよう。」（『ゴルギアス』449b4-b10）

この問いと答えという枠組みが、プラトンの描くソクラテスの対話の基本形である。しかしじっさいのところは、ソクラテスが一人で語り出す場面もあり、一問一答という言葉から受ける印象とはかけ離れたものもある。『ゴルギアス』の最終部では、ソクラテスが長々と一人で話した後に（517b-519d）、次のやりとりがある。

〔ソクラテス〕「ほんとうに私は大衆演説をさせられてしまったよ、カリクレス、君が答えようとしてくれないものだから。」〔カリクレス〕「いや、あなたは、誰かに答えてもらうのでなければ、話を進めることができないのですか。」〔ソクラテス〕「いや、そうでもなさそうだ。現にいまだって、君が答えようとしてくれないので、私はかなり長い話をしているくらいだから。」（『ゴルギアス』519d5-e2）

はないことを示すための付加である（245）。なお、本稿第３節では二つの引用文中に「真実」という訳語が出てくるが、いずれもこの形容詞中性形である（『ゴルギアス』の引用は複数形、『国家』の引用は単数形）。

[4] 例えば、加来彰俊訳『ゴルギアス』1967［2008］では「一問一答で話し合う」（477c，448d；翻訳 12，17）という訳が用いられている。もちろん優れた翻訳の工夫である。

ソクラテス自身が認めるように、『ゴルギアス』の最終部はもはや一問一答という形式ではなくなっている。しかし、それでもなお問いと答えという構成を維持していると捉えることができる。じっさい、このような長い話は、対話から離れようとする対話相手を再び問いと答えという動きへと引き戻すための装置として機能しているからである[5]。

視点を変えてこの問いと答えという運動を考えてみると、問いと答えという形式よりも、対話者たちの間での問いの共有こそが重要であることが分かる。ただし、ここでいう問いとは個別の質問のことを指しているのではない。何を問題として対話をしているのか、という認識の共有である[6]。プラトンの対話篇では、その主要部が開始されるのに先立って、何が問題であるかを浮かび上がらせ、主題となる問いを共有するために、多くの時間が割かれる。しかも、プラトンの描くソクラテスの対話はしばしばまったく異なった問いから開始され、その後の展開を知っている読者にとっては当然と思われるが、偶然とも見えるやりとりから主題となる問いが登場する[7]。つまり、問いの共有とは、あらかじめ用意されていた問いをソクラテスの対話相手が共有することではないのである。また、中期や後期の対話篇の対話相手は、同意するだけの人物と思われがちであるが、ときにはソクラテスの問うていることを捉え損ねることで、（読者を巻き込んで）基本的な問いを確認する対話が展開されるという場面に出会うことがある[8]。対話による探求がアポリアーに終わることを考えれば、問いの共有それ自体もまた対話の目的の一つであるように思われる。

これらの特徴から、プラトンの描くソクラテスの対話の概略は、十分に明らかにされたように思う。では、次に、その限界へと進もう。

３．ソクラテスの対話の限界

---

[5] 『プロタゴラス』でもソクラテスは一人で問いと答えを行ういわば疑似対話を繰り広げることで（338e-348a）、対話相手のプロタゴラスを再び対話に引き戻そうとしている。

[6] 納富信留『対話の技法』笠間書院 2020 は対話の特徴として「特定の同じ主題、あるいは問いを共有している」（28-9）ことをあげている。

[7] 例えば、『ゴルギアス』の最初の問いは「〔ゴルギアスは〕何者であるか」（447d1）であるが、ゴルギアスの答えをきっかけに不正と正義をめぐる対話へと転じる。『プロタゴラス』では「あなた〔プロタゴラス〕と交際すると、どんなことが自分に実現するのか」（318a3-4）という問いから、徳の一性や快楽主義についての問答が展開される。『国家』では「それ〔老年〕はどのようなものなのか」（328e3）という問いから国家と魂における正義についての対話が展開するのだが、イデア論が導入されるいわゆる中心巻（五～七巻）についてはソクラテスその人をして「脱線した〔脇道にそれた〕」（543c5）部分と呼ばせている。

[8] 例えば、『国家』第七巻の「相反する現れ」をめぐる問答（「三つの指の議論」）が導入されるきっかけは、グラウコンの答え（523b5-6）に対するソクラテスの「まったくの見当外れだ」（523b7）という指摘であった。また、後期対話篇の『ポリティコス（政治家）』では、主たる対話者はソクラテスではなくエレアからの客人であるが、対話相手である若いソクラテス（私たちのソクラテスとは別人）の誤解がしばしば露呈し、それを正すための対話が展開される（e.g. 262a3-264b6, 267c4-268d4, 268e8-269a6）。

プラトンが描くソクラテスの対話には、おそらく、直ちに思い浮かぶ限界がある。それは、ソクラテスの対話が一定の知的ないし言語的な能力を想定していることである。前節でのメノンの召使を相手とした想起の実験で、ソクラテスが最初に確認するのは「ギリシャ語を話すか」（『メノン』82b4）であった。『ゴルギアス』でも「魂が正しい生活を送っているか否かについて十分に吟味」するためには、知識など三つのものが必要だと明言している。

> 〔ソクラテス〕「私にはよく分かっているのだ、もし君が私の魂の思いなすことについて、私に同意してくれるのであれば、それら私の思いなしたことは既にもう真実であるということが。というのは、私はこう考えているからだ、魂について正しく生きているか否かを十分に吟味しようとすることは三つのものを必要とするのだが、君はすべてをもっている、つまり知識と好意と率直さ（パレーシアー）をね、と。〔略〕多くのアテナイ人が認めるように、君は十分に教育を受け終えており、そして君は私に好意的である。〔略〕私は君から、君が君自身の一番の仲間たちの者たちに忠告していたのとまさに同じことを、私に忠告しているのを聞いているのだから、ほんとうに君が私に好意的であることの十分な証拠が私にはあるということになる。また、君が率直に語り遠慮をしないことは、君自身が肯定しているし、またちょっと前に君が語っていた言論が君に同意してくれている。」（『ゴルギアス』486e5-487d5）

この発言に基づけば、ソクラテスの対話に参加できる者は限られてくるであろう。ソクラテスの対話相手のうちもっとも年少であるのはリュシスとメネクセノスという少年であるが、この少年たちを相手とした対話においてもソクラテスは彼らを対等に扱っている[9]。つまり、対話者たちが対等であることが理念的には求められていると言える[10]。そして、この対話者としての対等性が知的な能力や立場の対等性であると受け取られるとき、それは対話の参加者に一定の資格を課すことになる。そうだとすれば、プラトンの描くソクラテスの対話にはそもそも乗ってこられない人がいることになる[11]。

---

[9] 彼らは初等教育の終わりにさしかかっており、ホメロスやヘシオドスなどもおそらく読んでいるという設定である（『リュシス』213e3-214b2）。

[10] この対等性の要求は、直前の『ゴルギアス』からの引用にある「パレーシアー」が示唆するように、市民の間の対話が民主政の基盤として機能していたことに係わっている。M. Foucault はアテナイ民主政とパレーシアーとの関係について、「パレーシアーは公的な言説のための必要条件であり、個人としての市民たちの間で、そしてまた民会を構成する市民たちの間で行使される。しかもアゴラーはパレーシアーが行使される場なのである」（*Fearless Speech,* Semiotext(e) 2001, 22. 翻訳に際しては中山元訳『真理とディスクール パレーシア講義』筑摩書房 2002 を参照させていただいた）と指摘している。。

[11] 念頭にあるのは、サバルタンと呼ばれる人々の存在であり、納富信留の受けた問い（「対話は結局、健全な大人の間で交わされる理性的な営みが前提となっていて、それに欠けたものは無視され、相手にされないのではないでしょうか。対話はごく一部の人たちの間だけのものではないでしょうか」（納富 2020，140）である。

そしてもう一つの限界あるいは問題点としてあげられるのは、ソクラテスの対話が技法のように用いられ、濫用・悪用される可能性である。『国家』第六巻には、ソクラテスの対話に対しての――プラトン自身の診断ともみなすことができる――批判が書かれている。

〔アデイマントス〕「ソクラテス、確かに、それらについてはあなたに誰も反論できないでしょう。しかし、あなたがいま言われるようなことを耳にする者たちはそのたびに、何か次のような感じを受けるのです。彼らはこう考えるのです。自分たちは質問したり答えたりすることに慣れていないために、一つ一つ質問されるたびに言論によって少しずつ脇へ逸らされて、議論の終わりになると、その少しずつが寄り集められて大きな失敗となり、最初の立場と正反対になっていることが明らかにされ、ちょうど碁の恐るべき打ち手によってあまり上手ではない者が最後には閉じ込められて動きがとれなくなるように、自分たちもまた、今度はいくぶん違った碁によって、すなわち石ではなく言葉において、最後には閉じ込められて口を封じられてしまう、と。つまり、真実はけっしてそのようにありはしないのだ、と。」（『国家』487b1-c4）

この批判は、前節の対話の特徴二のなかで触れた対話者ラケスの不満を想い起こさせる。ただし、ここで問題としたいことは対話が「言葉を使うゲーム」として語られている点である。もしソクラテスの対話がたんなるゲームであるならば、人は哲学をすることなく、その対話の技法のみを身につけることも可能なのかもしれない。つまり、プラトンの描いた問答は対話の技法として、哲学抜きで使うことができるのかが問われるのである。そしてプラトンは、その可能性を認めていたように思われる。じっさい、アテナイの若者たちがソクラテスの行った吟味の営みを真似ていたことが、『ソクラテスの弁明』において報告されている。

〔ソクラテス〕「若者たちが私についてきて、彼らはとりわけ時間的な余裕があって、つまり彼らはもっとも裕福な家の者たちなのですが、自発的にやってきて、人々が吟味されるのを聞いては喜び、そして彼ら自身しばしば私の真似をして、他の者たちを吟味しようと試みるのです。そうして、どうやら彼らは、何か知っていると思ってはいるけれどじつはほとんど何も知りはしない人間たちを、とても豊富に見つけ出してしまったのです。」（『ソクラテスの弁明』23c2-8）

これはプラトンだけの診断ではなく、クセノポンも二人の名前をあげてソクラテスの対話の技法の悪用を指摘している。その二人とは、プラトンの親族でアテナイで恐怖政治を行ったクリティアスと時代の寵児にしてアテナイを窮地へと導いたアルキビアデスである。

「これら二人の人物（クリティアスとアルキビアデス）は生まれつきすべてのアテナイ人のなかでもっとも名誉心が強く、すべてのことが自分たちによってなされ、すべての

人のうちでもっとも有名なものとなることを望んでいた。他方で彼らは、ソクラテスが最小限の資産でもっとも自足した生活を送り、あらゆる快楽を最高度に抑制し、彼と対話する者すべてを彼が望むままに言論のうちで操るのを知った。彼らはこれらのことを見て、そして先に言われたとおりの者たちであるわけだが、彼らはソクラテスの生き方や彼が有していた思慮を欲して彼との交際を求めたと言うべきか、それとも彼と交われば語ることにおいてもそして行動することにおいてもまったく十全な者となると考えてのことだと言うべきか。〔略〕彼らが行ったことから明らかであった。すなわち、一緒に集まった者たちのうちで自分がもっとも優れているとなると、すぐにソクラテスから離れ、ポリスの事柄を行うようになったからである。これが目的であればこそ、彼らはソクラテスを求めたのである。」（『ソクラテス言行録』第一巻第二章 14-16[12]）

このような状況を前に、プラトンの『国家』第七巻では「対話することをめぐって生じている害悪」（537e1-2）が指摘され、結局、『国家』のソクラテスは問答法（ディアレクティケー）について年齢制限の導入という提案を行うことになる（539a11 以降）。

以上の二つの限界については、それらを乗り越えようと考えることが正しい方策とはかぎらない。本稿は乗り越えが困難であることを認め、むしろ限界を受け入れることで対話という概念の有する可能性が見えてくると考えている。

４．対話の可能性をめぐって

まず、プラトンの描くソクラテスの対話の特徴と限界との関係を確認しておこう。そもそも対話に乗ってこない、乗ることのない人がいるという点については、対話とロゴスとの関係が問題となっている。ロゴスに係る能力が対話への参加条件と見えるという問題である。確かに、『メノン』のソクラテスは「ギリシャ語を話すか」という仕方で言語運用能力を確認していた。この言語運用能力を拡張して、例えばどのような存在であれロゴスに与っているのだから、誰もがロゴスに係わる能力を有していると主張したとしても、問題は解消しないであろう。対話者としての対等性の要求は、その対象をどれほど拡張したところで、成人男性市民を実質的に標準としてしまいかねないからであり、そもそも成人男性市民としての対等性の付与をあえて拒否する人々もいると思われるからである。本稿の整理に従えば、自分の考えをもち、それを率直に述べるという、特徴二と三が暗に前提している対話者像が問題となっている。

二つ目の限界あるいは問題は対話の技法の濫用や悪用をめぐるものであった。対話が正解をもたないがゆえに正しい方向に進んでいるという確証がなく、したがって、対話の技法をどう使用したとしても、それを誤りとして制御できないという問題である。結果さえ得ら

[12]『ソクラテス言行録』からの引用については *Xenophontis Opera Omnia*, t.II, ed. E. C. Marchant, Oxford, 2nd ed. 1921 を用い、内山勝利訳（『クセノポン　ソクラテス言行録Ⅰ』京都大学学術出版会 2011）を参考にさせていただいた。

れればよいとすれば、重要なのは技法に習熟することであって、対話の意味や目的を考えることではなくなるだろう。あるいは逆に、対話はアポリアーに終わることから対話の成果を気に留める必要がないとすれば、問いと答えという形式さえ踏めば、内容はどうあれ、対話したという証拠を提示できることになり、対話は形骸化していくことになる。これらは対話がアポリアーに終わるという特徴一と、問いと答えという対話の特徴四に関係した問題である。

これらの問題に、プラトンの描くソクラテスの対話はどのように答えることができるのだろうか。例えば、対話の技法の濫用や悪用については、プラトンの『国家』で提案されたような、年齢制限などの対話外のルールによって制約することも一策である。しかしそれは、半面、対話という活動自体を制約することであり、対話は開かれたものではなくなる恐れがある。しかも、その解決法はかえって一つ目の限界として指摘された危惧を裏打ちしてしまうことになりかねない。すなわち、プラトンの描くソクラテスの対話は限られた者を対象としたもので、特定の存在を除外することで成り立っている、と。

じっさいのところ、プラトンの描いたソクラテスの対話はこれらの限界を乗り越えることはできないだろうし、また乗り越えるための手立てを講じないほうがよいと思う。というのも、プラトンの描くソクラテスの対話が対話や探求の範型であるとしても、それは何かを達成しているがゆえにではないからである。むしろ、プラトンの描くソクラテスの対話には限界と失敗があるからこそ、それは別の仕方での対話を検討する際に参照可能な、いわば灯台のような働きをもちうるからである。例えば、対話に乗ってくることのない人々には、プラトンが描いたものとは別の種と見える対話があるだろうが、その対話はプラトンの描くソクラテスの対話のいくつかの特徴を弱める、あるいはまったく備えていないという仕方で、対話としての特徴が際立つことになるだろう。問答というかたちではなく、あたかもモノローグのように語り出された言葉を聴くこともまた、対話と捉えることができることだろう。語り出された言葉のうちに問いを聴き取り、聴き手がその問いへと向かうなら、対話のための問いの共有が始まったと言えるからである。さらには、そのような対話には正解がなく、対話が続くことそのことが目的であるようなものであるかもしれない[13]。対話をこのようにソクラテスの対話の特徴に関連させていわば開いていくとき、私のようなプラトン読みが行うテクストとの対話もまた、比ゆとしてではなく、対話なのだと言うことができることだろう[14]。あるいはまた、問いを共有できなくとも、対話は成立するかもしれない。ソ

[13] 田坂さつき編『福祉ものづくり物語―あの人の笑顔を目指すものづくり―』ひみつの出版 2022 が報告する「重度の重複障害があり、支援者に対して意志を伝えることが難しい人たち」（29）との共同の探求は好例である。また、J・バニエ（浅野幸治編訳）『ジャン・バニエの言葉 講話とインタヴュー』新教出版 2012 が伝える「非常に重い障害があって、話すことができず、真っ直ぐに相手を見ることもでき」（52）ないリュシアンという人物の「二時間も叫び続ける」（53）その声を聴くことは、聴き手の側の攻撃性や傷つきやすさを問うものであった。

[14] プラトンと私たちとの対話については、納富信留『プラトンとの対話 対話篇をよむ』岩

クラテスの最期を描いた『パイドン』のクリトンはそうした例の一つと言えそうである。『パイドン』という対話篇の焦点は魂の不死の証明であり、その論拠としてのイデア論である。対話が終わり、ソクラテスが毒杯を仰ぐ段になって、クリトンは最後に「ところで、あなたをどのように埋葬しようか」（『パイドン』115c）とソクラテスに尋ねる。ソクラテスはそれまで対話してきた他の友人たちに向かって次のように嘆く。

> 〔ソクラテス〕「諸君、私はクリトンを説得していない〔納得させていない〕、私とは、いまここで対話し、語られたこと〔不死の証明やイデア論〕の一つ一つを配置している、このソクラテスである、ということをね」（『パイドン』115c6-8）

死によってソクラテスは肉体という牢獄から解放されて、残った肉体にはソクラテスはいない、このことにクリトンは同意してなお「ソクラテスを埋葬する」ことを心配している。確かにプラトンの描くソクラテスの対話は、説得とは違う。とはいえ、人生の多くの時間をソクラテスと共に過ごし、ソクラテスの問うことに心から同意してきたクリトンが、ソクラテスの最期のときにものの見事にやらかしている。ソクラテスとの対話は楽しい時間ではあっても、実生活には係わりがないかのようである。ソクラテスの人生を賭した対話の営みは友一人の考えを変えることができなかったとも言える。それでもなお、ソクラテスのまさに最後の言葉は、この長年の友クリトンに向けられていた[15]。つまり、プラトンは失敗と見えるクリトンとの対話を、ソクラテスの最期を飾るものとしてあえて描いたのである。人を納得させたり、導いたりすることがソクラテスの対話ではないことを、プラトンはきわめて鮮やかに描いている。

本稿はこうした限界と失敗こそが、むしろプラトンの描くソクラテスの対話を対話の範型として扱うことを可能としていると考える。限界があり失敗があるがゆえに、それは多様な対話の営みに対して開かれているのではないかと思う。このことを指摘して、本稿を閉じることにしたい。

（たなかしんじ・静岡大学）

波新書 2015 および中畑正志『はじめてのプラトン 批判と変革の哲学』講談社現代新書 2021（特に 88）参照。なお、D. Bohm, *On Dialogue*, London & New York, 1996 [2004] 4（邦訳『ダイアローグ 対立から強制へ、議論から対話へ』英治出版 2007［2022］39-40）は科学者が自然を相手に行う「対話（dialogue）」について言及している。

[15] 「クリトン、私たちはアスクレピオスに鶏一羽の借りがある。返しておいてくれ、忘れずにね。」（『パイドン』118a7-8）。「返しておいてくれ、忘れずにね」という動詞は複数形であるが、この言葉がクリトンへの呼びかけであることは明白である。

※ 本研究は JSPS 科学研究費 22K00009 及び 22K00097 の助成を受けたものである。